

もあらう。また他が推薦を肯ぜぬ者もあらう語る力はあつても審判役として公平ならざる者もあらうけれども淨瑠璃大家たる事は誰れでも肯諾する處。伊東柳平、麻生五福、笹村ふんご、萱林松玉、小西い京、三木金星宮崎三角、武田眞若、石村かつら、の諸氏は審査員として餘りに有名なれば、出来る事なら、別記十五名より撰みて新しき會の設立をと思ふ。尙早論はあつても明年ともなれば是非出て貰はれば審査會は成立しない。幾らやり手でも熟練といふ事は必要、一回でも多く審査に従事するが矢張一つの長者である。審査員缺乏の折柄奮起を望む次第である。新進斯道家も出でず、新たな會も産れず、新面の審査も必要なければ、結局審査會は死滅にいたるであらう。それはそこに何が無理がある故であらう。大い研究改善を要望してやまぬ。

生きて飛び走る藝

義太夫節は大阪訛り、都々逸は東京音、博多節は筑前潮來節は下總の俗語。松前節、曰く何、曰く何と皆それ／＼の訛りを尊重するを以て誇りとなさば。云ふを要せぬ野暮の繰言、日本

の標準語がわからぬ處に日本の藝術はない。標準語を植付けてから始めて藝が出来、其の藝は徳川時代の遺物、明治の傳統物ではない、赤い血の通ふ昭和時代、則ち現代の文明日本、純真なる日本人の氣魄を注入せる、いきて飛び走るものでなければならぬまい。

拙者の命數は知れてある、且に淨瑠璃復活の曙光を認むれば夕に死すとも可なり。時代は過ぎた。誠意斯道に盡さんとするものには熨斗を付けて本誌を進呈するものである。

吉田榮三自傳を讀む

樋口吾笑

日本古典藝術の殿堂文樂座の人形つかひ紋下吉田榮三師の自傳が發行された。これは日本の富豪鴻池幸武氏の著述である。鴻池氏は早稻田大學の文科出身と聞くが深く淨瑠璃に興味を有し其の研究は世の所謂すき者と異り文學藝術の兩全を期し淨瑠璃後援者にして又指導者である。

榮三師は辛苦多事全く門閥なく獨立獨歩で紋下の榮位をかち得たる淨瑠璃人形の

元師である。

鴻池氏は其の人格と意氣と而してまた非凡なる其の藝術を愛し、人形の最高位に推されたるを喜び自ら榮三師の爲に筆を執つて傳記をものし以て其の名聲を後代に傳へ、青年子弟の奮起に資し此の國寶藝術の復興に寄與せん希望に外ならざるべし。蓋し趣味者は熱し易く又冷め易く餘り澤山の期待はされないと相場はきまつて居る、獨り鴻池氏は所思を詳述七百頁を上梓し裝幀質素堅牢を旨とし全く榮三師のために發行されたのである。

太夫、三味線、人形と各人氣を主とせる職柄なれば皆それ／＼履歷の大略位は印刷に附したるものあるべし。竹本攝津太樑、豊竹呂昇の如きは見たれど吉田榮三師の如きは未だ嘗て見ざる所、これ偏に鴻池氏の人格が或る一致點を見たる結晶なるべしと思はる。藝術界にある人達は吉田榮三師を見做ふべし。また後援者は鴻池氏の志に習ひ永久に藝術及び藝術家の愛護に努むべし。